Dr.wasshii
ドクターワッシーの

認知症よもやま話

【第1回】

テレビ製認知症？

忘れても後で思い出せば大丈夫

今回から6回にわたって認知症をテーマにコラムを書かせていただく。こんなふうに執筆するのは随分と久しぶりだ。10数年前、北國新聞朝刊の生活面で連載していたから、ワッシー（自分のことを〝わし〟と呼ぶことから付いたニックネーム）のことを覚えている人がいるかもしれない。

先日、ワッシーのクリニックに大騒ぎの患者さんがやってきた。

「センセ。わたし認知症。この頃、人の名前が出てこない」

テレビで認知症をテーマにした番組でも見たのだろう。昔は、「みのもんた」だった。この頃は「たけし」や「ためしてがってん」の影響が大きい。本当の認知症の患者さんなら本人はケロッとしているから、大騒ぎする人ほどテレビの犠牲者といえるかもしれない。

したことをすぐ忘れる？

人の名前が思い出せないなんて、ワッシーなんか、しょっちゅうだ。いつも、「あれー、それー」で会話をすましている。記憶したものの想起がうまくいかないのだ。でも、「歳を取るにつれ、記憶したものの量が半端じゃないから、取り出すのに時間がかかるだけ」と、逆に威張っている。それが証拠に、ちゃんと後で名前を思い出す。

認知症では多くの場合、聞いたことや自分のしたことをすぐに忘れてしまうという記銘力（きめいりょく）の低下のほうが問題だ。ひどくなれば、人との約束を忘れて迷惑をかけたりする。そこまでいかなくても、し忘れや置忘れが目立つようになる。と、ここまで書いてきたら、ワッシーもちょっと心配になってきた。昨日も、風呂場の電気を消し忘れ、奥さんに言われて鼻白んだ。

患者さんが血相変えてクリニックへやってきたのは、口には出さないが、似たような失敗を経験しているのかもしれない。歳を取るにつれ、脳の神経細胞の数は減っていく。数が減れば、それなりに働きも落ちる。

脳が委縮（いしゅく）したとしても

年相応に脳の委縮が進んだとしても、それはイコール認知症ではない。ただの歳相応のもの忘れ。良性のもの忘れだ。そういう加齢による記憶障害かアルツハイマー型認知症によるもの忘れなのか、病気のごく初期には、専門家でも診断は簡単ではない。

大騒ぎの患者さんも、もの忘れのテストは満点で、頭のMRIの検査も合格だ。といっても、ワッシーなんぞが「認知症ではない。心配要らない」と言っても患者さんはなかなか信用してくれない。それほど、テレビで煽（あお）られた不安の炎はしたたかに燃え続ける。

だから、「今のところは、認知症の疑いはない。でも、念のため、半年後にもう一度診察しましょう」と言わなければならない。あー。

（石黒修三＝医療法人社団いしぐろクリニック理事長）